

大震災を風化させず、首都直下地震に備える

式典「3.11を忘れない」を開催

東日本大震災から3年を迎えた、本日3月11日、セッション杉並(梅里1-22-32)では、式典「3.11を忘れない」を開催し、津波などによって犠牲となった方々に哀悼の意を表するとともに、必ず発生する首都直下地震に備えるため、記念講演や南相馬市の桜井勝延市長のビデオメッセージの上映などを行いました。

セッション杉並では、午後1時15分から、式典「3.11を忘れない」が開催され、地域の防災会などから約400名が出席しました。第1部では、「過去の震災に学ぶ～自助と共助のまちづくり～」と題して常葉大学大学院教授であり、杉並区防災会議委員の重川希志依氏から、阪神・淡路大震災や東日本大震災から得られた教訓として、地域の防災力向上の重要性について講演が行われました。また、発災の時刻である午後2時46分には、犠牲者へ哀悼の意を表し黙とうを捧げました。

東日本大震災では、杉並区と災害時相互援助協定を締結している福島県南相馬市でも津波によって636名が犠牲になるなど大きな被害を受けました。杉並区では、震災直後から支援を行い、現在も8名の職員を派遣し復興計画の進行管理などに従事しています。その関係から、本日の式典では桜井勝延市長のビデオメッセージと南相馬市を拠点に活動する小中高生の女声合唱団、MJCアンサンブルのビデオコンサートが放映されました。MJCアンサンブルは、これまで、ウィーン少年合唱団とのコラボレーションや、バチカンを訪れてローマ教皇に歌声を披露するなど、震災に負けずに世界的に活躍しています。

また、田中良(たなかりょう)杉並区長は、式典のあいさつの中で、「大震災の記憶を風化させず、私たちの教訓として語り継ぐことが大切です。共に力を合わせ、来るべき都市型災害に備え、地域の防災力を高めていきましょう。」と話しました。



さらに、午前11時には、昨年に引き続き2回目となるシェイクアウト訓練(自主参加型一斉防災訓練)が行われ、約300団体の4万2千人ほどが参加しました。この訓練は、首都直下地震の発生時に、自分の身を守る訓練で、区内の小中学校や企業などに防災意識を高めてもらうことを目指しています。